

少女に転生した魔王が  
平和な世界で暮らしま  
す

のろとり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて最強最悪と恐れられていた魔王。

だが、その魔王は勇者に倒されこの世を去った。

そうして魔王は平和な世界に女の子として転生していた!?

力を殆ど失った上、友達も殆ど出来ない元・魔王の明日はどっちだ!

なお、この魔王は性別なしという設定ですが、『なし』から『女の子』となっているので『性転換』のタグを入れています。

# 目次

平和な日常

平和な二人

1

10



# 平和な日常

「おはよー」

「おはよー……もう十年か」

我輩は魔王。最も、元であるが。

簡単に説明すると勇者にやられていつの間にか、この少女の体に入っており力も殆ど失っていた。

しゃべり方は昔と変わらずこんなもの。

最初は自分らしさが残っていることに嬉しさを感じたが、いざ話そうとすると標準の言語になってしまう。

最近を意識すれば今と同じような言語で話せるが面倒なのでしていない。

それと年齢はもう1000を越えてから数えてない。

そのため我輩は周りの人間と比べて浮いていた。

それでも小学のときに仲のよい小娘が出来た。

「……マーちゃん？」

「な、何でもないよー！」

この小娘……いや『佳菜<sup>かな</sup>ちゃん』は茶髪ポニーテールの小娘である。我輩だけではなく、他の小娘とも仲が良いそう。

佳奈ちゃんに我輩の正体を言っていない。言う必要がないからな。

「あ、学校が見えてきたよ！」

昔を振り返っているともう学舎に見えてきたようだ。

それにしてもこの少女の体に入ってから時間が短く思うようになった。

人間の寿命は短いと聞いたことがあるので、それも関係しているのだろう。

だから……

「……あ」

学舎が見えてきたので、横断歩道なるものを気にせず走らないでほしい。

そのようなことをしていると、今のように自動車が行き止まりになるのでな。

佳奈ちゃんの注意不足でその短い寿命をさらに短くすることはやめてほしい。

そのためには我輩は……

「『時止め』」

躊躇なく力を使わせてもらおう。

先ほど『力を殆ど失った』と言ったが、まだほんの少し残っているのである。

日に日に多少回復しており、いつかはこの惑星を破壊出来る程度の力は集まるのだろ

う。

と言うが、それほどの力が集まるのは400年後程だろう。

だが我輩はこの世界での恩人の佳奈ちゃんを助けるために毎回使っている。

昔は世界征服もしていたが、今はもう興味が失せた。

そもそも征服したところで反乱が起ることにこの体になってから気づいた。

「佳奈ちゃん、無理したら駄目だよー」

我輩はもう一度力を使い、身体を強化した。

佳奈ちゃんを抱き抱え、横断歩道を通った。

自動車を動かそうとも考えたが、この非力な体だと何重にもしなければならず力が足りない可能性もあるのだ。

『解除』

それと同時に自動車が勢いよく走りだし、扉に激突した。

……そういえば先日薄型箱テレピで『居眠り運転』とやらの説明をしていたな。恐らくはその類いだろう。

全く、前の世界より平和なため『大丈夫だろう』という慢心がこの世界の人間達にはあるのだな。

「……………あれ？」

佳奈ちゃんは自動車にぶつかっただと思っただけ……まあ我輩が助けなければ  
そうなっていたであろう。

ここは惚けるか。学舎に遅刻してしまうからな。

「佳奈ちゃんどうしたの？」

「え？ う、うん！ 何でもないよ」

どうやら気のせいだと思っただよう。

本人は少し違和感を覚えているだろうが時期に忘れてくれ。

「……じゃあ今日も授業始めるぞ」

学舎とやらに来て感じたが、様々な人間がいるのだと知った。

肌が黒い人間、運動が異様に得意な人間、他の人間を信じられない奴等様々である。

生活していた地域にもよるようだが、我輩は人間を『種類』ではなく『個』と思っ  
たのもあるだろう。

人は『勇氣』と『恐怖』その二つのみの感情を持っていると思っただけだがそれは間違



いであつた。

これはこの世界に来てから発見した大きなことだと思ふ。

「つて、アイツは今日も居ないのか」

アイツ？ ああ、まだ我輩が見たことない人間か。

実は我輩は転校生とやらであり、最初に居た小学の学舎で馴染めなかつたのを気づいた親と一緒に移動してきたのである。

引越しと言ふようだが、我輩はずっと同じ城にいたのでしたことがなかつた。

「……あ、鬼崎は齋藤の家の近くに住んでるよな？」

鬼崎と言ふのは我輩であり「鬼崎 おにざき マロ」これが現在の我輩の名前である。

齋藤と言ふのは、遭遇したことは無いが学舎に来ていない人物である。

……そういえば近くの標識に『齋藤』と書かれた文字があつたな。恐らくはそこである。

「はい、そうです！」

「悪いが齋藤に今日のプリントとかを届けてくれないか？」

本来なら俺が届けるんだが、学校に残らないと終わらない仕事か……」

教師というのは大変だな。

国民から提出される金で働いている代わりに、中々帰れないとは。

教師に限った話では無いがそういうのは『ブラック企業』と言うらしい。

佳奈ちゃんにその事を話したら不思議がられた。恐らくは理解していないのだろう。佳奈ちゃんには難しかったのであろう。

「分かりました！」

我輩は佳奈ちゃん以外友達がないので、これを機会に作るのも良いかもしれない。そうして今日は少し嬉しい気持ちで学舎で授業を受けるのであった。

「……………なんだ」

学舎が終了し、佳奈ちゃんと途中で別れて斎藤とやらの家に着いた。

ふむ……確か『インターホン』とやらを押せば繋がるのであったな。

それにしてもこれはどのような作りになっているのであるのか。

前の世界では魔法が発達していたが、この世界では科学が発達しているようだ。

これはとても気になるな……おっと、押すのを忘れていた。

『はい、どちら様ですか？』

「○○○小学校の鬼崎です。斎藤ちゃんにプリント届けに来ました！」

そう言うのと、母親らしき人物が玄関から姿を現し我輩を家に招いてくれた。

我輩はプリント類を提出すると、母親に斎藤のことを聞いてみることにした。

「斎藤ちゃんは今何処に？」

問いたですと、母親が顔を一瞬暗くしたが話し始めた。

「あの子、前はとても元気だったんですけど……」

とある日から少しずつ家にいるようになってね。

最近は学校にも行かずにずっと部屋にいるの。

学校に行つて貴方見たいに可愛い子と仲良くなれば良いのに……」

ふむ……我輩は少しその斎藤とやらの興味が湧いた。

これも友達を作る試練だと思えばいいのだろう。

「斎藤ちゃんに会つてもいいですか？」

母親は一瞬躊躇つたが、我輩を部屋に入れることを許可してくれた。

斎藤の部屋まで来ると母親は先程我輩と一緒に居た部屋に戻つていった。

恐らくは一緒にいると我輩の話を聞いてもらえないと感じたのであろう。

それにしても……この部屋にはとてもない違和感を感じる。

実はこの家に入ったからそうである。

我輩の家に入つても分からなかったのは、弱体化しており気配の察知能力が格段に落ち

たのだと思う。

「まずは入ってから確かめるか！」

何時でも力を使えるようにし、ゆっくりと扉を開けた。

部屋を見るとゲーム機とやらの類いがそこらじゅうに散らばっているのが分かる。

そして何よりその部屋の中央にいる人間に目を見開いた。

髪はボロボロで少し眺めの金色をしている。

だが其処らはどうでもよい。先程から感じている違和感はコイツであろう。

その人間が此方に気づいたようで、振り向いた。

我輩はその人間……いや、人物を驚愕した。

何故だ……何故コイツがこの世界に居るんだ！

「この感覚……」

その人物も感覚で感じたのか、薄型箱テレレピに『ポーズ』という文字を出した此方を向いた。

そうして我輩と同じように驚愕した。

「勇者、どうしてこの世界に居るのだ！」

「ま……まさかお前は魔王!?!」

「……ま、いや」

そうして勇者はポーズという文字を削除した。

それと同時に音楽が流れてきた。  
我輩はこの勇者を異様に殴りたくなつた。

## 平和な二人

「……で、何故貴様がこの世界におるのだ？」

我輩は話しをしようとせず、ゲームとやらを続けようとした勇者を殴った。

勇者は少女の体から放たれた拳程度だが、痛かったように床を転がっている。

我輩の話を聞いて無いのが悪いのだ。

「私がここに居る理由？ 死んだからだけど」

「え、勇者死んじやったの!？」

我輩は驚いて、この体の口調で返した。

まさか……この魔界の王である我輩を倒した勇者が、負けるほどの相手が居るとは。

ぜひ会いたいものだ……会うことは無いだろうがな。

そう我輩が驚いてると……

「魔王倒した後、足滑らして頭打ったらこの体になった」

我輩はもう一度勇者を殴った。

こ……転んで死んだだと？ 末代までの恥だな。魔王を倒した勇者が足滑らして死ぬ

とはな。

今頃、魔界も人間界も大変だろうが……まあ、もう関係ないことだからどうでもいい。「いったいなあ、急に殴るなよお」

「貴様が転んで死んだのが悪い」

まったく……世界征服まで一步と進んだ魔王と、その魔王を倒した勇者がこんなありさまだと、笑われてしまうだろう。

……もつとも、その時代を知ってる者が居ないから笑われるようなことは無いがな。

「……ところで貴様は、どうして自堕落な生活を送っているのだ？」

そう、そこだ。

我輩は勇者も転生していたことと同時に、そのことも気になっていた。

誰かに洗脳されているのだろうか、それとも演技なのだろうか。

「え？　だって、ゲームとか楽しいじゃん」

我輩は気が済むまでコイツを殴りたい。

ゲームとやらの娯楽が楽しくて、ここまで自堕落な生活をしているだと……！

「ほら、さっさと出ていきな」

………しようがない、あまり使いたくなかったが元々はそのつもりだったのだ。

我輩は薄型箱テレレビに体と顔を向けている勇者に向けて、指を鳴らそうとして……ある者が

目に入った。

「……スライム？」

「ん？ ああ、このキャラか。私たちの世界のモンスターに似てるでしょ？」

確かに。

細かくところは流石に違うが、似ている。

攻撃手段やら、言語を話さなかつたりとよくよく見ると思った以上に違いがある。

「……」

「……やる？」

「え？ い、いや我輩はゲームとやらに興味ないよ！」

べ、別にモンスター以外にもどこが似ているとか、どんな世界だか思った無いからな、私の世界と似てるな〜としか思っていない。

「……口調」

「あ、やべ」

動揺して口調が体に引つ張られてしまった。

我輩と勇者との間に微妙な空気が流れる。

「……」

「……ほら、一緒にやろうぜ」



「しよ、しようがないね！」

私は勇者にリモコン……コントローラー？を貸してもらって、ゲームとやらをした。

へえ、この世界ってこうなってるんだ！それで、主人公が元は村人で、おー！村を救うために魔王討伐をするのね！

「あ、勇者！ モンスターが現れたよ！」

「ちよ、それレア級モンスターじゃん!？」

「あ、逃げられたな」

「……我輩に背を向けるとは良い度胸な、逃げられると思っているのか?」

「落ち着け、落ち着け！ ゲームだから、ゲームだから落ち着け！」

「塵一つ残さず潰してくれる！」

「落ち着けって言ってるだろう!？」

あ、コントローラー……

わたさ ンンツ！ 我輩は勇者にコントローラーを取り上げられて、ゲームを没収された。

時刻は既に夕暮れ。

夕陽が沈みかけており、——冬ならばすでに真つ暗な時間だろう——カラスの鳴き声が聞こえている。

我輩は勇者とその母親に見送られていた。

「また来ますね!」

「待ってるわね」

「じゃーな、マオ」

「じゃあね、千裕ちゃん!」

我輩たちはゲームをした後に、改めて自己紹介をしたのだ。普通に「魔王」と「勇者」で呼んでも良いと思っただが、周りの目があるので此方この世界での名前を知っておきたかったのだ。

勇者は『齋藤さいとう 千裕ちひろ』と言うようなので、『千裕ちゃん』と呼ぶことにした。

我輩の名前を教えると、『鬼崎 マロ』でしょ? なら……『マオ』で」となった。——我輩は嫌なのだが——勇者曰く、魔王と呼んでしまっても、誤魔化しが聞くからだそう。

「二人とも、もう仲良くなったのね」

前世からの縁だから、そんなものだろう。

それに我輩たちは既に【敵】ではなく【友達】だからな。

「またゲームやろうね！」

「いや、それは勘弁して」

我輩は勇者……いや、千裕ちゃんに断られたがそれを聞く気は無かった。